

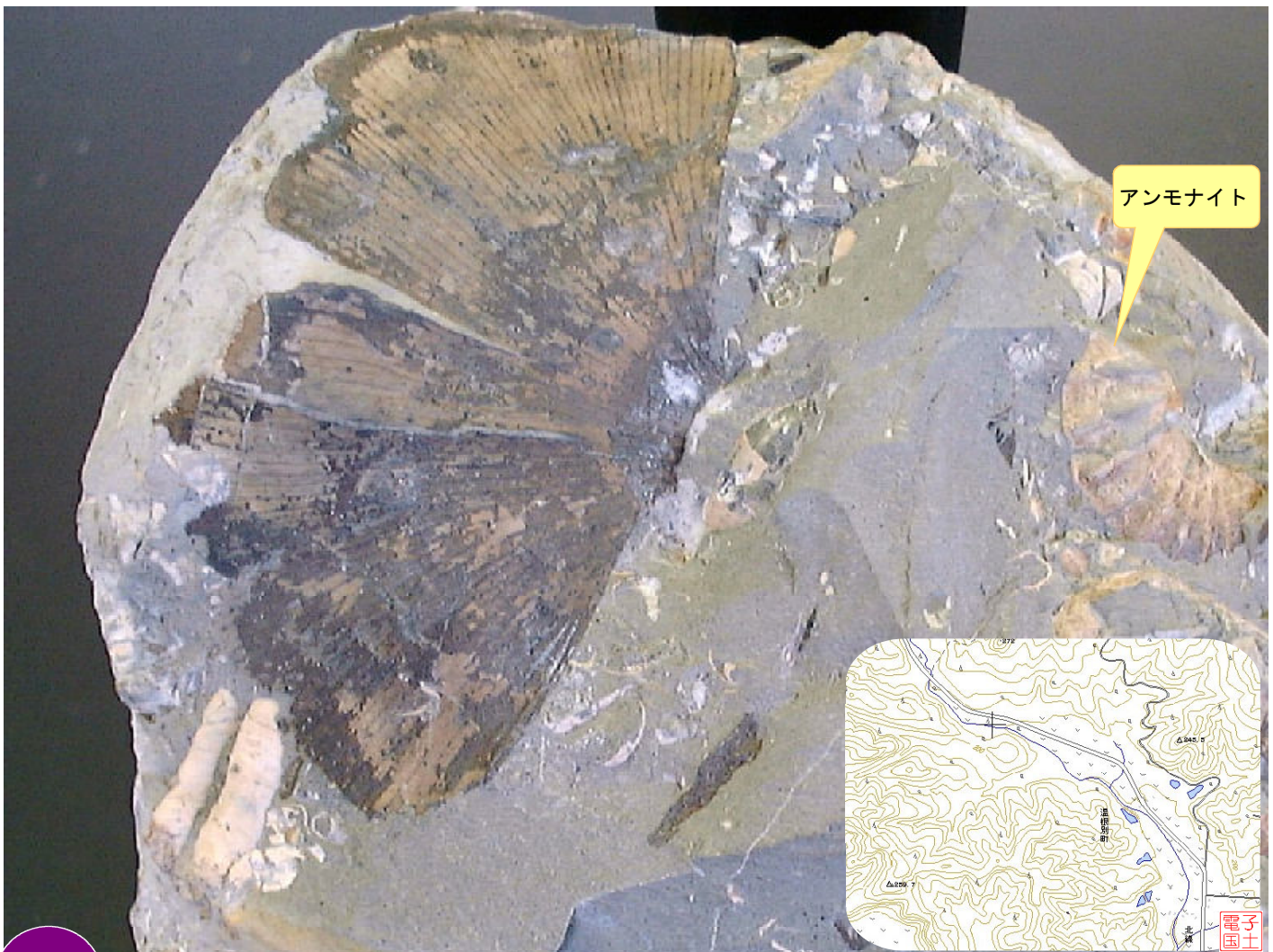
今も生きている化石

岩石名 イチョウの葉化石 *Ginkgo.sp*

時代 中生代白亜紀後期

地質区分 エゾ累層群

産出地 士別市温根別北線川



解説

士別市温根別で発見されたイチョウ（銀杏）の葉の化石です。中生代白亜紀の地層、蝦夷累層群のノジュールから発見されました。イチョウはかつては多くの種類がありましたが、士別の標本の化石は、まさに私たちが知っているイチョウと同じ種類のもので、そこに樹木の葉の化石があるということは、砂の堆積場が陸地から近い場所だったということを示しています（上の写真のように、イチョウの化石と一緒にアンモナイトの化石が見られます）。また、温根別市街地近くの採石場でも、植物の破片が多数含まれる蝦夷累層群の砂岩が観察され、当地域の蝦夷累層群の形成場が、陸地に近い海底であったことを示しています。

～ Coffee break ～ イチョウ

イチョウは「生きている化石」といわれています。イチョウ類は、約3億年前（古生代後期）に出現し、中生代に繁栄し、化石では17属が知られています。



現生のイチョウの葉

新生代第三紀まではヨーロッパから北アメリカにまで分布していましたが、中生代末までに多くの種類が恐竜とともに滅んでしまいました。日本におけるイチョウ化石の記録は、新生代の鮮新世～更新世の約200万～100万年前まで知られていて、地球の寒冷化に伴って絶滅したと考えられています。

イチョウ類は、裸子植物の1グループで、イチョウ綱に属する植物は、現生のものは中国に分布する一種のみです（日本の街路樹等のイチョウは植樹されたものです）。